

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

「先住民文化遺産」の観光商品化： クンブレ・タヒンの事例から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 致広, Kobayashi, Munehiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1123

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「先住民文化遺産」の観光商品化 ークンブレ・タヒンの事例からー

小林 致広

はじめに

グアテマラにおける先住民抵抗の500年運動を扱ったビデオ映像『風の記憶』（Alter Cine Inc./Alba Films,1992、日本語版1993年）のなかで、極右民族革命運動の大統領候補は、グアテマラにおける先住民の伝統文化を尊重していることを強調し、おおよそ次のように語っている。「グアテマラの民族的表現はグアテマラの宝です。きちんと保存するつもりです。合州国にも紹介するつもりです。ディズニーランドのステージで披露でもすれば、世界中がわれわれの民族的表現の素晴らしさを知ることになるでしょう」

先住民性を表に出した文化祭典は、人種差別や先住民に対する抑圧が顕著だったグアテマラでも早くから行なわれてきた。1960年代末、グアテマラの先住民民族ケクチ居住地域の中心都市コバン市で組織されたコバン民俗祭典は、グアテマラにおける「先住民文化祭典」としてもっともよく知られたものである。ラディーノが組織したコバン民俗祭典がもつ意味については、1970年代後半に刊行された先住民雑誌Iximの第8号の論文「マヤ民族への表敬行事へのレクイエム」が詳細な形で分析・批判している（小林1985:86-98）。そこでは、文化的真正性の保持・復帰というイデオロギーに内在する反動性が指摘されている。先住民の文化を称揚しているように見えながら、先住民の文化的伝統の不妊化と固定化が強制され、先住民の現実に根ざした生き生きとした伝統が否定されているという。

このような先住民の伝統文化に関する理解は、先住民はもはや現在の世界に生きる場がない過去の存在であるという考え方を反映している。先住民が現在の世界で価値を生み出すとすれば、過去に栄光ある文明を築いた人々を思い起こさせる媒体としての商品価値である。絶滅危惧種に登録された希少動物と同じように、先住民の文化的伝統は固定化されたイメージのまま保護・保存すべき遺産となっている。先住民のイメージをめぐる生産された多様な商品を消費させるためのカタログは新しいレッテルを貼られ、先進国の消費者に送り込まれてくる。多文化共生やエコロジーが前面に出される現代では、「地球に優しい生き

方をする先住民族」、「自然と共生する先住民族」といったキャッチフレーズはなじみの深いものである。

本稿では、民族文化祭典のメカニズムを分析することを通じて、先住民族というイメージが外部者によってどのように操作されているのか、それに対し先住民族がどのような対応を示しているのかを明らかにし、先住民族としてのアイデンティティ表出という問題を考察することにしたい。事例として分析するのは、メキシコ・ベラクルス州の世界遺産のエル・タヒン遺跡（以下、エル・タヒンと略）周辺地区で2000年以降開催されてきた文化祭典、クンブレ・タヒン（la Cumbre Tajín、以下クンブレと略）である。この祭典で動員される先住民文化をめぐるイメージ操作について分析することにする。

1992年に世界遺産に指定されたエル・タヒンはベラクルス州中北部のパパントラ市近郊にある。パパントラ一帯は先住民族トトナコ¹⁾の居住地のため、エル・タヒンもトトナコの建設したものと見なされている。エル・タヒンは起源700年頃に建設され1200年頃まで続いた古代都市遺跡で、壁龕のピラミッドやペロータ球場があることで知られている²⁾。メキシコ国内の先スペイン期遺跡のなかで訪問客数が17位だったエル・タヒンは、世界遺産認定の10年後は、テオティワカン、チチェン・イツァー、モンテアルバンにつぐ第4位に昇格した。1999年は約22万人だった訪問者が、2003年には68万人と3倍も増加している（Ahmad 2004:29）。観光客急増の原因は世界遺産指定よりも2000年から始まったクンブレとあってよい。このクンブレは、エル・タヒン周辺を会場に春分の日前後に開催される文化フェスティバルである。

I. 代替的ツーリズムとしてのクンブレ・タヒン

本章では、新千年紀の事業としてクンブレを企画・推進してきたベラクルス州知事ミゲル・アレマンの在任期間中（1998年12月—2004年11月）、クンブレの推進者がとってきた対応を大まかにたどることにする。

1. 観光開発事業としての新千年紀文化フェスティバル

この文化フェスティバルは、当時のベラクルス州知事アレマンによってベラク

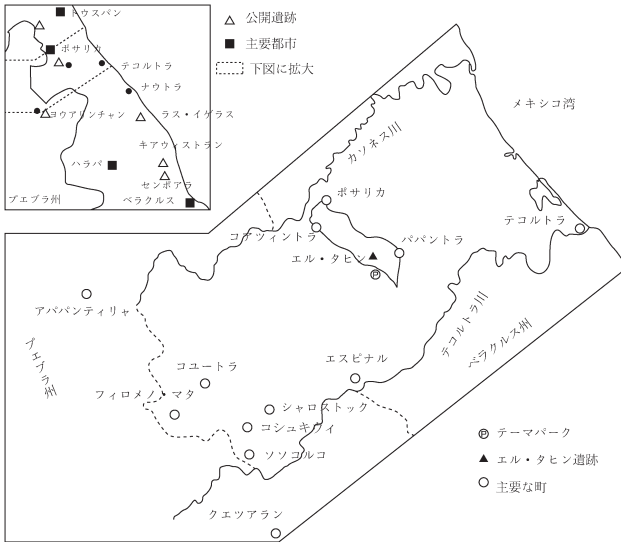
1) 2000年センサスではトトナコの人口は約40万である。トトナコについては、Masferrer (2004)を参照。

2) エル・タヒン遺跡については、Brüggemann (1992)を参照。

ルス州北部の観光開発計画の一部として発案されたものである。代替的ツーリズムと銘うった計画はベラクルスから北のトトナカ地方 (Totonacapan) 全域を組込む大規模なものだった。風光明媚なナウトラからテコルトラまでのエメラルド海岸、ラス・イゲラスやフィロボスの壁画遺跡、キアウストラン、センポアラなどの先スペイン期都市遺跡、そしてベラクルス、ラ・アンティグア、サンファン・デ・ウルア要塞などの初期植民地都市をネットワークで結ぼうとするものだった (地図1参照)。この観光回廊整備で、年間40万人だった地域の観光客を増やそうとしたのである。

この観光回廊の核とされたのが世界遺産に指定されたエル・タヒンである。計画では、パパントラから遺跡まで4キロの並木道路建設、北西の都市ボサリカまでの4車線道路の拡充、道路沿いに200室の旅行者用バンガロー建設などの基盤整備事業が謳われていた。また、計画では、地域社会の雇用創出といった点も強調された。遺跡の近くにトトナカ様式の建物を建築し、遺跡周辺でパニラや民芸品、刺繍品などを売る人が商売できる常設店舗とすること、考古学専攻の専門ガイド、簡易補修技術のある遺跡管理者の雇用などが謳われていた。また、自然破壊という批判に対応するため、シンボルとしてのボラドールの木を中心にセドロの木な

地図1 トトナカ地方



どが植樹された人造湖のあるエコロジー公園の建設も謳われていた。

しかし、先スペイン期遺跡、先住民族の民芸品、風光明媚な自然だけでは、観光客は引き寄せられない。先行するオアハカ州のゲラゲツァ、プエブラ州のアトリスカヨトルのような民族文化祭典と同じ構成ではインパクトに欠け、観光客の獲得合戦に太刀打ちできない。新千年紀にふさわしい先進的な技術やメディアの手法を駆使し、イベントそのものを商品として売り、営業利益を生み出すことが必要である。こうして、1999年大晦日から2000年元日という千年紀の移行にかこつけ、世界遺産の遺跡を舞台とした音楽や踊り、演劇、CG映像を組み込んだスペクタクル・ショーが企画されたのである。

遺跡内でのスペクタクル・ショーに関して、企画者側から次のような提案がなされた。遺跡での中心事業として提起されたのは、遺跡の神殿構造に負担をかけている重い石材を軽い石材に換える修復作業である。作業に必要なヘリコプターなどの経費500万ペソを州政府が負担するが、修復作業が終わった後、千年紀移行を祝う儀式のため3日間の遺跡開放を認めてほしいというものだった。さらに、設立当時のままの博物館を充実し、サービス施設も改良することなども提案されていた (*La Jornada*, 11/septiembre/1999)。

1999年10月のハリケーンによる洪水のため、大晦日に予定されていたスペクタクル・ショーは延期された。しかし、それまでの投資を無駄にしないため、企画者側は千年紀の最初の「春分の日」を迎える行事としてフェスティバルを企画した。神殿前の空間でスペクタクル、ピラミッド前で太陽エネルギーを吸収・充電する儀式などで遺跡を利用することが、入場料収入の2割上納という条件で、国立人類学歴史学研究所 (INAH) によって認可された。

2. 州営事業としての「タヒン2000年、千年紀の春」

フェスティバル企画者は、遺跡内アローヨ地区のペロータ球技場に面する広場にスペクタクル・ショーを観覧するための栈敷席を設置した。遺跡に隣接する空間³⁾はイベントの会場となり、2500人収容可能な仮設テントが設営された。企画者側は、米国、ブラジル、アルゼンチン、スペイン、日本、オーストラリアなどでもプロモーションを展開したという⁴⁾。

2000年3月17-21日、「タヒン2000年、千年紀の春 (Tajín 2000, Primavera del

3) この空間は、現在は拡充された博物館や食堂、駐車場などのスペースとなっている。

4) 入場料は1日当たり千から5千ペソ (邦貨1万円から5万円) と高額だった。3月初旬の段階で、前売りチケットは1割しか捌けていなかった。

Milenario)」と題するフェスティバルが開催され、スペクタクル・ショー、ワークショップ、健康増進などのイベントが行なわれた⁵⁾。当初予定されていた3月17日正午の「新しい千年紀の火」の儀式や州知事の開会挨拶はなかったが、17日夕刻、カフェ・タクーバの演奏、プレペチャ式のペロータ球技者による式場の祝福でフェスティバルは始まった。開会式と終了式にはアレマン州知事も参加し、5日間で延べ1.4万人が参加したという。

統括責任者としてフェスティバルを仕切ったのは、テレビサ通信の元副総裁ガストン・ベロだった。20日夜の遺跡でのスペクタクル・ショーは、性行為を思わせる裸体のペアの踊りが巨大な画面に映し出されるなど、テレビ放映むけに構成され、5チャンネルで中継放送された。フェスティバルの目玉商品は、国内外の一流ミュージシャン⁶⁾によるライトアップされた遺跡を背景にした野外コンサート、3月20日の夜のスペクタクル・ショー、3月21日の春分の日における太陽エネルギーの吸収・充電の儀式だった。

統括責任者は、共同体の伝統文化保持者の参加を強調し、フェスティバルを「都市生活と濃密な共同体生活を関係づける架橋」と位置づけ、生み出された利益を地域に還元することを強調していた。しかし、ワークショップにおける地元住民の参加は希薄だった。開会式などのパフォーマンスとして先スペイン期の文化要素とされる「新しい火の儀式」や「ペロータ球技」があったが⁷⁾、トトナカ地方の伝統文化が前面に押し出されることは少なかった。

3. スペクタクル・ショーからクンブレへ

2000年の閉会式で一部観客がペロータ球技場の石組みに登ったため、球技場の石組みが崩れる事態が発生した。商業的スペクタクル・ショーによる遺跡の一部破壊という事態を受け、州政府や INAH、クンブレ反対派の間で遺跡利用をめぐる攻防が展開された。トトナカ地方の先住民組織代表は、2001年3月上旬、ミチヨ

5) スペクタクルとして、セネガル民族舞踊やブラジルのカポイエラなどの踊り、曲芸、操り人形など、ワークショップとして、バニラ細工作り、民族玩具作り、ベラクルスの民俗舞踊ハローチョの講習などがあった。健康増進として、清め儀礼などの民間医療、手相やタロット占い、各種マッサージや代替的セラピーがあった。

6) 2000年はカフェ・タクーバ、エウヘニア・レオン、オラシオ・ブランコ、ネグラ・グラシアーナ、コロンビアのトト・ラ・モンボシーナなどのコンサートがあった。著名アーティストのコンサートはクンブレの目玉のひとつである。

7) プレペチャ式のペロータ球技はゴムボールをホッケーのような棒で相手陣地に追い込むゲームである。近年ではゴムボールに火をつけて行なわれるようになった。

アカン州ヌリオで開催された先住民全国議会総会でクンブレ反対を表明したという。一方、州知事は世界遺産遺跡を修復・保存するための財源を州レベルで確保する意義を強調し、INAHの官僚主義が意義深い事業を妨害していると主張した。

結局、2001年のフェスティバル会場は、INAHが指定した遺跡地区の外側にテーマパークとして設営されることになった。パパントラーポサリカ道路から遺跡に向かう道が分岐する地点クルセスの東、道路南側の敷地が指定された⁸⁾。一方、遺跡損壊に備えた1千万ペソの保険金、遺跡保存の名目で500万ペソのINAHへの寄付という条件で、アローヨ地区の石組みのない広場での閉会式コンサートが認められた(Morales 2001)。強度調査に動員された警察官が一度に載ったため、観覧席が崩落し、死者1名と多くの負傷者がでるといふ事故が起きてしまった(Morales y López 2001)。

また、商業的なショーに偏重しているという批判から、フェスティバルには多様な文化的要素が組み込まれることになる。INAHの指示で、地域の先住民文化への配慮があることを示すため、2月22日にトトナカ最高審議会(Consejo Supremo de Totonaca)など先住民長老や呪医が参加し、「伝統的儀式」が遺跡構内で実施された。それは、エル・タヒンの神々からの「春分の祭」の実施許可をえる“li tlan”という儀礼だった(López 2001)。

一方、「千年紀の春」に代って、クンブレという名称がフェスティバルにつけられた。夜間のスペクタクル「タヒンの光りと声(Luz y voces de Tajín)」は、西洋文化とトトナカ地方の伝統文化がコラージュされた場面で構成されたものになった。「羽毛、トウモロコシ、サッカーへのオマージュ」の場面では、地元の結婚式の曲を演奏する地元バンドとタヒン交響楽団に合わせた現代風な振り付けのダンスが演じられた。ほかにも、修道士服姿の人々の隊列、トトナカ語の叫び、オラシオ・フランコのアルパ演奏と地元バンドのセッション、現代風な振り付けの「蛇の踊り」などが上演された(Ravelo y López 2001)。

約4万人とされるクンブレ参加者の半数以上は春分の日の訪問者だった。この日、太陽エネルギーの吸収・充電という名目で約5万人がエル・タヒンに入場し、2万人程度がテーマパークを利用したとされる。つまり、テーマパークの訪問者は1日平均4千人弱程度だった。先住民の伝統文化をうかがわせる要素が部分的に取り込まれたが、クンブレはビジュアルな音楽ショーの域を脱することはなかった。

8) この場所はユネスコ指定のエル・タヒン遺跡地区に含まれている。ユネスコ指定の遺跡地区には、エル・タヒンなどの3つの集落や複数の農場(rancho)などがある。

アレマン知事は、クンブレが定着するには4半世紀は必要と強調しながら、次年度以降のクンブレ実施に向け一連の対策を実行していった。ひとつは、エル・タヒンの管轄を連邦政府からベラクルス州への移行やクンブレ継続の是非についての住民投票を行なうことだった。広報活動に5千万ペソを投じた8月26日の住民投票は17%という低投票率だった⁹⁾。もうひとつはクンブレの常設会場を遺跡近辺に設営することだった。2001年9月下旬、知事は、「タヒン春の壁龕計画2001-2004」を通信交通省に提出した。計画では壁龕のピラミッドから東へ500メートルの斜面へ1万人収容の見物施設を建設することになっていた。しかし、この地区は未調査のランチョ・エル・クリストと呼ばれる遺跡の居住地区で、高さ14メートルの観覧席が美観を損なうことは自明だった。2002年1月、INAH考古学審議会は立ち木伐採作業の即時停止を命令し、「タヒン春の壁龕計画」は頓挫した（Ravelo 2001, 2002a）。

II. 多文化性を謳ったイベントとテーマパーク設営

2002年以降のクンブレは過去2回とは少し趣の異なるものになる。INAHの勧告に従い、遺跡内での開会式や閉会式は実施されなくなった。そのかわりに、3月16-23日の8日間、遺跡を舞台にした「タヒンの光と声」と題する90分のスペクタクル・ショーが1日2回公演されることになった。このスペクタクル・ショーは、500~700人の観客が一団で、遺跡の各場所で上演されるスペクタクルを眺めながら移動するというものだった。

1. 2002年のクンブレ

2002年のクンブレでは、「多様な感覚の出会い（Encuentro de los Sentidos）」というテーマが設定された。各イベントは、「多様な感覚を通じ、個々人の心に通じる道を模索する」ためのものとされた。イベントの核として位置づけられたのが「儀礼、魔術、自然の諸要素が融合するトトナカの世界」だった。集客面での目玉である音楽シーンに関しても、イスラム世界を紹介する方針が明らかにされ、モロッコ、チュニジア、パキスタン、アルジェリアなどから音楽家が招聘された。この理念に沿って企画されたのが遺跡を舞台としたスペクタクル・ショー「タヒン

9) 住民投票では、ラグナ・ベルデの原子力発電所の安全調査問題などに関しても賛否が問われた。実際の投票率は7%だったとされる（Jiménez 2001；Castro Soto 2002）。

の光と声」である。ショーの演出・企画は、イヴ・パパン（Yves Pepin）が率いるフランスのマルチメディア会社 ECA2 が担当した¹⁰⁾。パパン演出の「タヒンの光と声」は、作家カルロス・モンテマヨール編纂の「タヒンの6つのお話」に基づいて構成されていた¹¹⁾。

一方、クンブレ会場の常設化も着々と進展していく。「タヒン春の壁龕計画」は頓挫したが、州政府はクルセスに設営されたテーマパーク敷地をクンブレ関連用地として確保した。テーマパークの西側の区画には、VIP、ツーリスト、学割の3ランクの宿泊施設が設営された。一方、東側の区画には、出会い、音楽、大地、香りと味覚、清浄（purificación）、ルーツなどのニッチェ、踊りの広場、ワークショップの空間などが設置された（Ravelo 2002b）。テーマパークにはトトナカ語で「起源、始まり」を意味するタキルスケット（Parque Temático Takilhsukut）という名称がつけられた¹²⁾。

2. 2003年のクンブレ

この年の開催期間は3月19日からの4日間に短縮された。その背景には、EZLN 司令官の参加が噂され¹³⁾、クンブレ反対派による対抗フェスティバルが組織されたことがあった。一方、フェスティバルが富裕層向けで、地元住民はアクセスできないという批判に応え、フェスティバル前日の3月18日の「タヒンの光と声」が無料で上演されることも明らかにされた。

「アイデンティティのフェスティバル」という副題がクンブレに正式につけられ、世界の諸民族の土着的な固有の芸術的表現を中心テーマとすることが明らかにされた。先住民族トトナコがフェスティバルの切り盛り役となり、テネーク（ワステカ）、ナウァ、ポポロカなどの州内先住民族も招待客として参加することが謳われた。開会式では「トトナカの家」の祝福式が行なわれた¹⁴⁾。トトナカ最高審議会のファン・シンブロン（Juan Simbrón）がクンブレ執行プロデューサーのサ

10) パパンは、セビリアやリスボンの万博開会式、フランス革命200周年、フランス・ワールドカップ（1998）などを担当した。パパン登用の背景には州知事夫人がフランス人だったという指摘もある（Castro Soto 2002）。

11) この「六つのお話」はモンテマヨールが採録編集した民話に基づくものと思われる。

12) テーマパークが最終的に完成したのは2005年である。

13) EZLN 副司令官マルコスの州知事批判が新聞に発表され（Marcos 2003）、知事が EZLN 司令官をクンブレに招待すると応対し、対抗フェスティバルへの EZLN 司令官の参加が検討された（FRDPC 2003）。

14) 2003年の様子は Morquecho（2003）を参照。

ロモン・バスバス (Salomón Bazbaz) に伴われ、トトナコ指導者という触れ込みで登場し、今回のクンブレは先住民参加という点でこれまでと本質的に違うものであると宣言した。

ワークショップでは、民芸品制作、土着の料理、踊り、「先スペイン期の宗教儀礼や秘儀」などが行なわれた。ギジェルミナ・オルテガが作成した女性や病気を治療する女神を讃える“Kiwichat, la mujer de kiwikgolo”と題するインスタレーションの前では、会場警備の警官の武器に対する伝統的な清浄儀礼が行なわれた。トトナカ詩人フン・ティビルシオ (Jun Tibircio) は、「平和と再生」をテーマに土器や木材で作ったインスタレーションを展示した。コシュキウィ地区サバナス・デ・シャロストックのテホロネスの踊り、タヒン・バンド、コアツィントラ地区チョーテのカボラーレス、トトナカ劇団などトトナカ地域の民俗芸能の上演も数多く組み込まれていた。同時に、メキシコ各地の土着遊戯の集会やアラブやユダヤの踊りの上演も行なわれた。

だが、多くの人の興味を引いたのは健康増進、リラックス、マッサージのセッションだった。春分の日、前年度の倍近くの4.5万人がテーマパークに入場したとされる。太陽エネルギーの吸収・充電の儀式だけでなく、テーマパークでの「新しい宗教」の体験の場に参加した。首の捻りなどの整体、聖水による頭部マッサージ、清めの儀礼、踊りによる治療などを受けた参加者は、複雑な祈禱などぬきで問題の解決策を手にしたのである。テーマパークにおける伝統文化の役割は、大都市の中間階級による文化消費の多様なメニューのひとつでしかなかった。スノップでこだわりのない購買力をもった若者を惹きつけるには、伝統文化だけではなく、大掛かりなコンサートや芸術・民芸・舞踊などのワークショップ、健康促進や浄化儀礼、グルメや秘儀など多彩なメニューが不可欠だった。

クンブレ期間以外、テーマパークは無用の長物という批判に対応するため、小学生的の見学、州教育文化局、ベラクルス文化協会 (IVEC) や全国先住民庁による先住民関連の会合の会場として活用する方針が明らかにされる。その一環として、トトナカ文化の広報普及、地域の料理、民間薬草利用、舞踊や芸術活動の伝統へのアクセス提供を目的としたトトナカ地方文化センター設立が提案された。作業を州政府と連携して推進するため、民間財団「エル・タヒン推進連合 (Unidos por El Tajín A.C.)」が設立されることになった。

3. 2004年のクンブレ

2004年末に任期が終了するアレマン知事は、クンブレによる収益で遺跡の修復・

維持の財源を確保できるとして、クンブレ事業の継続を訴えた。制度的革命党の知事候補フィデル・エレラも、クンブレの継続を選挙公約とした。多額の公的資金投入という批判に対応するため、クンブレの運営を州政府から民間に委譲することが不可欠だった。そのため、「すべてのベラクルス人のためのクンブレ」という旗印の下、ベラクルス北部の民間企業による信託基金を創設する構想が打ち出された。

「すべてのベラクルス人」のためと謳ったため、4日間の期間中、先住民族トトナカの家族約500名がVIP待遇で招待された。また、2004年の「タヒンの光と声」では、「タヒンの6つのお話」だけではなく、トトナカ詩人フン・ティビルシオの詩も朗詠されている。「トトナカの家」には祭壇が設けられ、治療や清めといった伝統的儀式が行なわれた。トトナカ地方の芸術家による伝統芸能などパフォーマンスは前年度とほぼ同じ内容といっよ¹⁵⁾。また、「民族集団の声」では、各州から招待された先住民族の伝統芸能などが紹介された。「音楽の壁龕」では、ミチョアカンの老人の踊りなどの集客力のある伝統芸能が上演され、寛ぎの空間として設定された Chillout Room では、さまざまな癒しのサービスの提供が行なわれた。

アレマン知事は、エル・タヒン、トトナカ文化、自然遺産の3要素を謳い文句に、クンブレを州営事業として組織化し、州北部の観光産業の活性化を図ろうとした。ベラクルスのカーニバルだけだった観光の目玉をもうひとつ創り、観光客を誘致しようとした。任期中にクンブレに投資された州の資金は3億ペソを越え、予算はグアナフアト市で開催される国際セルバンテス祭の2倍に達するという(Castro Soto 2002)。2004年度のエル・タヒンの年間訪問者は約100万人という予測で(Posada García 2004)、投資効率を考慮しないなら、クンブレが観光推進事業として果たした効果は絶大だったといえよう。

Ⅲ. クンブレの民営化と「伝統文化」の取り込み

2004年末に州知事に就任したフィデル・エレラは、優先課題のひとつとしてクンブレ実施を軸にした統合的観光開発を掲げていた。しかし、「スペクタクルよりは文化」を唱え、クンブレの内容に変更があることは予測されていた。2005年の開会式には初めてフォックス大統領夫妻が出席し、前年の抗議行動で出されていた逮捕命令も撤回された。また、遺跡破壊という批判を考慮し、夜間スペクタク

15) 2004年の内容は Martínez Cabral (2005) に詳述されているが、開会式などは前年と同じである。

ル・ショー「タヒンの光と声」は中止された。

1. クンブレの民営化

新政権が取り組んだ変更点の一つは、批判が大きかった州政府の支出を減らすため、クンブレ運営を民間主導にすることだった。「すべてのベラクルス人のためのクンブレ」という方針が掲げられ、2005年1月、州内の諸企業、パパントラ、コアツィントラ、ボサリカなど地元の市当局、IVEC など民間組織、諸個人が参集して、さまざまな検討が行なわれた。こうして、テーマパーク運営信託基金 (Fideicomiso Público de Administración y Operación de Parque Temático Takilhukut、以下テーマパーク財団と略) が発足することになった。だが、地元自治体は参加せず、運営の主導権はベラクルス州統合家族開発 (DIF) 総裁の州知事夫人がとることになった。民営化という旗印でテーマパーク財団が発足したが、州政府の権限が減少することはなかった¹⁶⁾。

2005年のテーマパーク運営のため、財団が計上した年間予算は3800万ペソである。その約半分の1700万ペソがクンブレ運営のために支出された。残りの2100万ペソは、テーマパークの通年活用という方針で開催されるイベントや事業に使われることになった。クンブレに対する州の援助は、アレマン時代には8千万～1億ペソだったが、現州政府になって大幅に減少し、2005年の州政府負担は800万ペソ、2007年の州政府負担は総経費7千万ペソの3%の200万ペソと大幅に減少した。

この背景にはテーマパーク財団の発足がある。2007年の財団の事業総予算は

表1：2000－2008年のクンブレの財政（万ペソ）とテーマ

年度	期間	予算	州分	入場者	売上	テーマ
2000	17-21	8000	8000	1.4万		
2001	17-21	9000	9000	4	530	
2002	17-23	7400	7400	2.2		多様な感覚との出会い
2003	19-22	1500	1500	4.5		アイデンティティの祭典
2004	18-21	5000	1500	4.3	1050	
2005	18-26	5600	800*			トナカパンのアイデンティティと文化
2006	17-21	6000	800*	12**	6000	水・生命 (agua-la vida)
2007	17-21	7000	200	12		豊饒、民族的アメリカ
2008	19-23			16		言語、存在の住処 (lengua, la morada de ser)

* 2005、2006年度は連邦予算1000万ペソが加わる

**2005年以降の数値には、春分の太陽エネルギー充電儀式のための遺跡入場者も含まれる。

16) パパントラなどの市会や周辺のレストラン業界関係者は信託財団に参加できなかったという。

3276万ペソとなっている。884万ペソが文化イベントに参加したアーティストなどへの支払い、854万ペソがロジスティック関係の運営費、考古遺跡関係への出費が802万ペソで、テーマパーク運営に割当てられたのは333万ペソだった。一方、収入としては州政府からの拠出金2587万ペソが全体の4分の3を占め、財団自体の拠出金は689万ペソである。財団自体に連邦・州政府の公金が投入されていることは明白で、2005、2006年度は先住民居住域の観光産業の推進を図ろうとする連邦政府の拠出金1000万ペソもあった¹⁷⁾。

2. テマパークにおける伝統文化の強調と育成

テーマパーク財団は、ベラクルス州の先住民のアイデンティティを育成するためのセンターとしてテーマパークを位置づけ、多様な文化との出会いと対話の場にすることを宣言した。テーマパークはアミューズメントではなく、先住民文化創造のスペースになることが強調された (Cumbre Tajín 2008a)。地元先住民への関心を強調するかのように、2005年のテーマは「トトナカ地方のアイデンティティと文化」とされた。クンブレでは、トトナカ地方や州内他地域、メキシコ各地の先住民が保有している伝統文化の展示やワークショップが用意された。

先住民文化の育成活動は、2005年設立のベラクルス先住民芸術育成センターを軸に展開される¹⁸⁾。共同体開発、芸術、生産、教育の部門での新世代の育成を目標とするセンターの活動は表2に示したとおりである。活動で特徴的なものは先住民子弟への奨学金供与である。クンブレ入場料収益の一部をトトナカ地方の先住民大学生の奨学金とすることは当初から謳われていたが、2007年度は収益の3割が学生84名に供与された。2007年発足のベラクルス・インターカルチュラル大学分校の誘致は失敗したが¹⁹⁾、テーマパークの通年活用と結びつく週末開催の文化教室も充実されていく。2008年にトトナコ最高審議会が設立した「春の家」では、先住民の哲学、文化、芸術を表現する場となり、2009年からは民芸製作技術養成コースも発足するという。

17) それを反映し、これまで一度も参加しなかったフォックス大統領夫妻が2005年の開会式に参加している。

18) センター運営には、トトナコ最高審議会、IVEC、ベラクルス教育庁、ベラクルス大学、ベラクルス・インターカルチュラル大学、ベラクルス民衆芸術協議会、地域自治体といった地元組織のほか、CDIやメキシコ自治大学などが協賛者となった。2008年には、約40のワークショップが開催された (Cruz Bárcenas 2008)。

19) UVIのトトナカ地方分校は、テーマパーク内ではなくエスピナルに設置された。メキシコのインターカルチュラル大学に関しては小林貴徳 (2008) を参照されたい。

表2：先住民芸術育成センターの活動内容

	事業内容	対象	後援協力組織
1	ボラドール学校 Tzu Kgosni	トトナカ地方子供25名	CDI、FONCA
2	アイデンティティのイメージ	トトナカ文化の映像化	CDI、UVI、UPT
3	奨学金	先住民大学生	
4	伝統医療	毎週80名に技術指導	CST、CMTT、赤十字、IMM
5	民衆芸術ディプロマ	専門家による教育	
6	UVI 分校予定地	民芸地域ネット、クンブレ支援	CVAP、IVEC
7	文化体験交流	寄宿舎生60名に文化講座	
8	伝統織物裁縫技術	民族衣装の作成	
9	伝統的土器製作	毎週のコース	
10	文化育成養成	文化社会推進員の支援	UNAM、CDI

CDI：全国先住民開発委員会、CMTT：トトナカ伝統医師協議会、CST：トトナカ最高審議会
 CVAP：民衆芸術ベラクルス審議会、FONCA：全国芸術文化財団、IMM：メキシコ・マサージ学院
 IVEC：ベラクルス教育庁、UPT：Unidos por El Tajin、UVI：ベラクルス・インターカルチュラル大学

テーマパークを会場として行なわれる事業も、ベラクルス州 DIF 主催の子供の祭典“Kani Tajin”、子供の夏期キャンプ、バニラ生産者会議、あるいは教育・社会・宗教関連の集会やレスリングなど、多彩なものになった。2006年のクンブレ開催期間以外に、テーマパークでは10の計画、6つのイベントが開催され、利用者数は4.2万人だったとされている。

入場料収益の一部をエル・タヒンの管理主体 INAH に納めるという構造は、クンブレ開始当初から堅持されている。2007年度はタヒン・チコの修復、2008年度は浅い浮き彫りと壁画の修復に使われることになっている。文化遺産の活用を図る INAH のお墨付きにより、テーマパーク財団は、クンブレの役割は地域の文化変容の重要な推進役であり、州内の先住民の経済、教育、文化面において決定的な影響力をもつ存在と自己規定している。

3. 文化のスペクタクル化とハイブリッド化

「タヒンの光りと声」が上演されないため、2005年のクンブレの入場者数は2万人強と低めに予測されていた。テーマパーク入場料は大幅に安くなり、先住民の文化尊重という看板のため、トトナカ地域の先住民は民族衣装を着用すれば入場無料になった。2005年の場合、クンブレ期間が8日間あり、聖週間の休暇と重なっていた。こうした好条件のため、2005年度のテーマパーク入場者数は大幅に増加した。フォックス大統領が出席した3月19日の入場者は1.9万、3月20日の春分の日には4.5万に達したとされている。州知事は、クンブレ入場者の8割が若年層であり、若者が自らの文化を誇りに思うようにする文化政策は成功してい

ると強調した。クンブレの知名度は高まり、「光りと音のスペクタクル」を「光りとインディヘニスモのスペクタクル」に格上することに成功したとする（*Orizaba en Red* 22/marzo/2005）。

クンブレには、「アイデンティティのフェスティバル」という副題があるが、年ごとに特定のテーマ設定が定められている。テーマ設定が始まったのは2002年で、「多様な感覚の出会い」というものだった。2005年以降は、先住民族に関連の深いテーマと国際的なテーマが交互につけられてきた。2005年は「トトナカ地方のアイデンティティと文化」、2007年は「豊饒、民族的アメリカ」だが、メキシコで第4回国際水資源フォーラムがあった2006年は「水・生命」、国連国際言語年だった2008年は「言語、存在の住処」となっている。

表3は、地元トトナカ地方の文化の独自性が強調された2005年のクンブレの展示やパフォーマンスを整理したものである。トトナコ・ワークショップでは、焼き物や棕櫚織物、バニラ細工といったトトナカ地方の伝統工芸が紹介されていた。しかし、特産のバニラ細工を除けば、他地域にも存在する極めてありきたりの民衆工芸でしかない。テーマパークの来訪者に関心を抱いてもらうには今ひとつ役不足である。「伝統と創作」のセクションにある伝統文化体験・創作コースはそれを反映している。

クンブレではトトナカ地方だけでなく、ベラクルス州の他地域に居住する先住民族集団ナウヤやサポテコの伝統医療や伝統芸能などが紹介されている。音楽に関しては、ベラクルス州北部のウアパンゴ、ベラクルス州中部のファンダンゴだけではなく、カリブ海域のソン、ダンソンといったカリブ音楽のパフォーマンスが行なわれている。トトナカ地方に固有な伝統文化だけを展示したのでは入場者の拡大に繋がらず、地域の伝統文化を越えたインパクトのある文化商品が必要なのである。

表4は、2006年と2008年の出し物の構成を整理したもので、2005年度以降、クンブレに盛り込まれる商品としての文化の編成に見られる特徴を読み取ることができる。世界遺産のお墨付きだけでなく、生きている先住民族の伝統文化をはっきりと売り出すことが要請されている。先住民族の伝統文化として思いつくのは、民族音楽や民族舞踊などの民族芸能や民族衣装である。これらを組み合わせた民族芸能フェスティバルは、先住民族の伝統文化を紹介するもっとも簡便なやり口である。地元の伝統文化紹介という場合、地元の名物料理や伝統料理、民芸品や特産物の紹介は地域産業の振興という面からも必要となる。しかし、トトナカ地方には目玉となる民芸製品がない。2006年度は、海岸低地地域の伝統的なトラピッ

表 3：2005年度のクンプレの展示・パフォーマンス

	展示名称	具体的展示		
トトナカ地方	トトナコ・ワークショップ	焼き物、棕櫚織物、バニラ細工、ロウソク作り、後帯機、土器製人形、蔓籠、刺繍、切り抜き紙細工、rodeadores, faroles y estrellas		
	民族集団の声	コーヒー試飲、伝統操り人形、バニラ老職人との対話、子供ネグリーートの踊り		
	演劇	トトナコ劇団 Planta y Flor、山岳部と海岸部の Cazador		
トトナカと他州	芸術ワークショップ	先スペイン期伝承、造形芸術 トトナコ画家との協作	メキシコ民衆玩具、落書き Cumbrecloew de Aziz Gual	
州とカリブ海域	リズム	ウワバンゴ、fandango jarocho ソン、afroveracruzano	ソン、ダンソン、カリブ・ダンス カボエラ	
トトナカ州内と他州		トトナカ	州内	その他
	文化ワークショップ	Lauderia バンダ・タヒン Pakilistli トリオ Xoxocapa トリオ culebreros の世界	ナウァ呪医伝統医療 ナウァのコリード バハパンのアルパ アカユカンの話 アンサンブル・センソントレ Jaranero Solitario サボテコ綱渡り	国立フォルクロア・アンサンブル
	浄化	伝統医療	伝統医療	代替セラピー、マッサージ、集団健康増進
実習体験	伝統・創作	凧造り、気球造り、パティック造り、モビール作り、芋版作り、アニメ製作		

表 4：2006年と2008年のクンプレにおける出し物の会場区分

	民族文化	音楽・芸能	食と伝統民芸	参加体験	その他
2006	平和の祈りの儀式 ボラドールの祝福 民族集団の声	音楽 Nicho 踊り広場 生命のリズムと歌 ワークショップ ジャガー広場	香りと味 Nicho トトナカ伝統製糖 バニラ館	浄化 Nicho 儀礼 Nicho	子供 Nicho
2008	ボラドール広場 トトナカの村 祖父母の家 (伝統儀式)	音楽 Nicho Talleres 土着スポーツ遊戯 見世物芸術広場 Ambiental	香りと味 Nicho 民芸品 Nicho	浄化 Nicho 儀礼 Nicho Tamborama Sensorama	Animacion、キャンプ 屋外スポーツ DIF Nicho Florecimiento Nicho ベラクルス大学 Nicho

チェによる黒砂糖作りが上演され、バニラの出産地ということでバニラ細工実演がバニラ館で行なわれている。だが、バニラという製品自体が個人消費財でないため、商品としてプロモーションする効果は少ない。

伝統民芸品がインパクトを欠く場合、フェスティバルで活用される候補は二つほど考えられる。その一つは民族芸能である。しかし、地元だけでは不十分で、国内外の民族芸能も動員され、クンプレにおける文化ハイブリッド化は顕著なも

のとなっている。表5は2008年に上演の舞台芸術（arte escénico）を整理したもので、テーマパークやパパントラ市の広場でも、国内外の伝統民俗舞踊の上演が行なわれた。国外からはセネガル、マグレブや中東のアラブ舞踊、インドネシアのバリ舞踊、インド・ケララ州のヒンズー舞踊、ポリネシア舞踊などのグループが参加している。国内からは、ベラクルス大学の現代舞踊・パフォーマンスのグループのほか、パパントラのウアバンゴ、トトナカ地方の土着舞踊のグループなどが参加している。民族舞踊の実演だけでなく、民族舞踊の体験・習得といったワークショップも提供されている。2008年の場合、カンペチェ、チアパス、タバスコ、チワワ、ベラクルス州の先住民族の伝統的スポーツや遊戯の実演も行なわれた。

表5：2008年のクンブレにおける見世物会場の演目

	実演	参加型
トトナカ/ ベラクルス	パパントラ民俗舞踊、トトナカ地方の伝統舞踊 ナウァトル語ハラバ少年民族舞踊 Pilmijtotianij 海岸部のネグリート	山岳部ウアバンゴ ネグリートス Son Jarocho y Zapateado
中南米	エクアドル・金の蘭民俗舞踊	鍛練・音楽カボイエラ、ダンソン サルサ、コロンビア木の声
他の地域	マグレブ、中東のアラブ舞踊と詩、セネガルの ウォロフ舞踊とダカールの舞踊、インドネシア 舞踊、ポリネシア舞踊 Parimas y Hulas ケララの古典ヒンズー舞踊 Mohiniyattam	アラブ風踊り、ウォロフ踊り バリ舞踊ジャクティ・タリ ポリネシア舞踊、マラバル風踊り 儀礼言語
現代	舞踏言語の出会い、現代舞踊・パフォーマンス 肉体舞踊、ボディペインティング舞踊 ポボル・ウーフに基づく舞踊「聖なる絵文書」	身体表現法、秘密のコード
曲芸	ウァウァ、メキシコ風サーカス、アタイデ・サーカス	

もう一つの方策は民族の「精神性」である。先住民族の精神性を体現する宗教的儀式などのパフォーマンスが採用される。2008年のクンブレでは、トトナカ長老による伝統儀式実演が浄化や儀式の空間に組み込まれている。浄化の空間では、トトナカに伝わる伝統治療だけでなく各種の民間治療やグループ・セラピーが行なわれてきた。2004年の場合、モレロス州テポストランを本拠とするグループなどによる北米先住民の蒸し風呂テマスカルだけでなく、チベット仏教徒による瞑想セラピー、ヨガや太極拳、和尚といった東洋式のものも導入されている（Martínez Cabral 2005:cap.4）。浄化や儀礼の空間では、マヤやアステカ式と銘うった先スペイン期の占いとともに、ジブシー占いやタロット占いも用意されていた。

「精神性」を強調した新文化が取り込まれる傾向は、春分の日の甦った太陽エネルギーを受け取る儀式とも無関係でない。白い衣服をまとい太陽エネルギーを

摂取する儀式は、1980年代からメキシコ各地の遺跡で始まり、規模は次第に大きくなっている。2005年には、近隣のベラクルス、タマウリパス、ヌエボ・レオン、サンルイスポシ州だけでなく、中央高原諸州からも多くの巡礼者が参加している。白衣装の巡礼者だけでなく、コンチェロス、さらにはサンタ・ムエルテの第1回巡礼も組織されている。2006年度から45ペソの入場料が徴収されているが、遺跡入場者は8万人に達している。

2005年のクンブレでは「タヒンの光りと声」は実施されなかったが、2006年にはライトアップされた遺跡への夜間入場が認められ、2007年からは、文化的な意味付けが強調され、「タヒンは生きている (Tajin Vive)」という新しい「光りと音のショー」が始まっている。表6に示したように7つの段階で構成される²⁰⁾このショーは、聖なる時空間へ出入する一種のイニシエーションと位置づけられている。ショーが上演される遺跡という空間への移動は、俗なる空間から聖なる空間への移動に擬えられ、夜間ショーに参加することで、参加者は聖的活力を注入される仕組みになっている。夜のスペクタクル・ショーは、昼間の太陽エネルギー充電の儀礼とセットとして提供されているのである。

表6：2007年「タヒンは生きている」の構成

	名称	遺跡内の場所	意味付け	イベント
1	Purificación 浄化	入口	入場前の清め	トトナカのクランデロのコバルトトナカ祭壇で祈りによる清め
2	Permiso 許可	Plaza de Arroyo	聖なる空間への進入許可	ネグリート、羽毛のネグート サンミゲリートの踊り
3	Fuerza 力	南の球技場	ペロータ球技	先スペイン期ペロータ球技映像投影 インストゥルメンタル音楽
4	Encuentro 出会い	E5,3,23,15 Plaza de Monolito	神々と人の出会い	
5	Revelación 啓示	Piramide de Nicho	天空への上昇	Quetzales de Zozocolo 少年コーラス
6	El cielo 天空	E3,E23,北の球技場 Tajin Chico	星々の祝典	Quetzalin の踊り
7	Renacimiento 再生	E15,E12から出口		羽毛のネグリート トトナカ祭壇の横を通過
	Despedida 別れ	遺跡外側のボラドール 広場	聖なる空間からの 離脱	Volador de palo

出典：“Cumbre Tajin” www.art-history.mx, Pedro Daez, “El Tajin 2007, cultura y tradiciones”

20) 通年実施の方針が立てられ、整備費として連邦政府は500万ペソを割り当てた (Solis 2008)。

IV. クンブレに対する反対運動

2000年3月12日、パパントラ市で第2回文化財防衛フォーラム²¹⁾が開催され、州政府や遺跡利用を認可する INAH 執行部に対する批判が続出した。パパントラ市民連盟は、イベントが特定の企業や便宜提供者の懐を潤すだけで、高額な入場料のため地域の先住民はイベントに参加できず、栈敷設営工事のため遺跡内を通過できないなど日常生活への影響を指摘した。PRI 系先住民組織のトトナコ最高審議会も「至高の存在」が鎮座する聖なる空間が汚されていると強く批判した (Morales 2000b)。州政府によるクンブレの企画発表段階から、エル・タヒンの商業的利用には、考古学関係者や研究者から根強い批判があった (Ravelo 2000)。遺跡地区で商業的イベントの実施が、「遺跡、考古・美術・歴史地区に関する連邦法」や INAH 法に抵触することは明白だった。2001年の連邦布告によるエル・タヒン遺跡区画設定²²⁾は、クンブレ反対派の主張を踏まえて制定されたが、クンブレ推進派の州政府関係者は、遺跡区画の面積縮小の画策²³⁾やクンブレの収益で遺跡保護費用を捻出できるというキャンペーンを展開していた。

クンブレに対する批判は大まかには3つに分けることができる。ひとつは、エル・タヒン内でのスペクタクルなどの実施にともなう遺跡破壊の恐れがあるにもかかわらず、文化遺産を商業的に利用していることに関連した問題である。ついで、クンブレ関連事業が地元社会の発展という面でもたらすさまざまな影響の問題がある。さらに、社会発展のプロセスにおける地元先住民の参加や自治をめぐる問題がある。

1. クンブレの地元への貢献

トトナカ地方の地元住民は、クンブレに関連して州政府が実施する諸事業が地域住民の生活向上にどれほど貢献しているかという批判をつねに投げかけてきた。地元共同体のタヒン、パパントラ市、あるいはトトナカ地方に、クンブレの経済的効果が届いていないという不満はつねに存在してきた。

21) 文化財防衛戦線は NGO、労働組合、研究者、先住民・農民組織、独立市民が参加した1999年の第1回フォーラムで形成された。第2回フォーラムには、先住民トトナコが居住するイダルゴ、プエブラ、トラスカラ、ベラクルスの109行政地区から代表団が派遣されたという。

22) エル・タヒン遺跡の範囲としては、1998年に INAH が定めた遺跡地区120ha、2001年3月の連邦布告 (Diario Oficial de la Federación 2001) による広義の遺跡地区1221ha がある。

23) 現ベラクルス州知事フィデル・エレラ (当時は連邦上院議員) が遺跡区画の縮小案を上程していた。

クンブレ事業の経済的な効果のひとつはクンブレ関連事業にともなう地元住民の雇用創出である。しかし、地元の住民に雇用機会を与える点に関しては、極めて限られた貢献しかなかったといつてよい。信託財団が明らかにした2006年のデータでは、クンブレ開催期間に生み出された「地域」の雇用は1608名、州の雇用は241名となっている。テーマパーク内での出店は一部のコネのある業者に限られ、飲食店に関しては2004年まで地元関係者の出店は排除されていた。テーマパーク内の清掃、警備、サービスの部門にはパパントラやボサリカなど都市部の住民が採用され、地元の先住民に割当てられた業務は、テーマパークのトトナカの家などで民族衣装姿で訪問者を接待するというものだった。また、遺跡内で夜のショー「タヒンの光りと声」において最後に民族衣装姿で見送る役は、2004年の場合、日当千ペソと高額な報酬だった。だが、仕事の従事者選定の権限はトトナカ最高審議会代表やパパントラ地区 PRD 所属の先住民カシケに握られていた。

一方、パパントラ市当局の対応も一貫したものではなかった。初期の段階では、パパントラ市当局の姿勢は非協力的なものだった。パパントラ市当局は聖体の祝日に合わせ、地元産品の見本市や伝統芸能の上演を組み合わせたフェスティバルを1958年から行なっていた。現在のバニラ祭 (Festival Xant) は、エル・タヒンのミニチュア模型を設営した市の中心広場で6月上旬に行なわれている。州政府主導のフェスティバルがエル・タヒンで実施されることは、パパントラ市当局には寝耳に水の話だった。しかも、クンブレ主催者はバニラ祭をクンブレ期間に上演するように市当局に要請していた²⁴⁾。ところが2004年には、パパントラ市観光局長は、市内のホテル・モーター、レストラン、輸送業者はクンブレの恩恵を十二分に受けていると表明している。

クンブレ実施に当たり、生活改善事業の実施などが約束されたが、実現することにはなかった。パパントラーボサリカ道路を横断する歩道橋建設が約束され資材が持ち込まれたが、3年間も放置されたままだった (Celia 2003)。2001年8月、タヒンに「テレビ授業高校」建設が約束されたが、結局実現しなかった。2004年、基盤整備事業を求め、タヒンの住民は1月半ばから道路封鎖を行なっていた。州政府が下水事業実施に向けた調査を約束したので、道路封鎖は解除されたが、クンブレ後も調査が行なわれなかった。2001年に定められた考古地区内にあるタヒンなどの集落は、土地利用の変更や新規建設などの禁止による経済活動の制限に

24) パパントラ市首長は州政府の野党候補が就任している。パパントラ市首長は、トトナカ地方の首長はクンブレ開催に同意としたという州知事の見解を否定し、2002年にはクンブレでのバニラ祭実施を拒否した。

対する埋め合わせとして、遺跡入場料の3割を基盤整備に割当ててことを求めている。2007年段階でも、遺跡地区の5集落6千人は水道や下水施設もなく、診療所スタッフも不足していると緊急対策を求めている（Bustos y Jiménez 2007）。

2. クンブレに対抗するタヒン地方文化フォーラム

2000年以降も、反クンブレの抗議行動はさまざまかたちで展開されてきた。抗議行動の組織化は、初期段階では全国文化財防衛戦線、2006年以降はサパティスタの「別のキャンペーン」支持グループによって行なわれたといっていよう。一連の抗議行動では、ベラクルス州を本拠とする農民民衆組織中央組織（Central de Organizaciones Campesinas y Populares, COCyP）に属するトトナカ地方の共同体農民がつねに動員されていた。クンブレ期間中の抗議行動の動員は2003年までは500人以下だった。それ以降は、2004年－4千人、2005年－1,500人、2006年－4千人、2007年－5千人、2008年－600人と社会状況の変化に応じて増減している。

トトナカ地方文化財防衛戦線の関係者は、2001年から2006年までの抗議行動の目的を表7のように整理している（FTDPC 2006）。反対派の基本的な主張は、考古学地区は研究調査の対象であり、スペクタクル・ショーなど商業目的の利用は違法というものだった。毎年、クンブレ実施を認めた INAH の決定に対して仮処分申請をしてきたが、受理されることはなかった。もうひとつの論理は、トトナカ文化がスペクタクル、秘儀趣味、娯楽といった金儲けの手段となり、先祖伝来の文化が消費商品となっているという批判だった。3つめの批判点は州政府当局の公約がほとんど履行されなかったことである。

2002年3月のトトナカバン社会フォーラムに続き、2002年12月にはパパントラ市で第3回文化財防衛フォーラムが開催された。フォーラムでは、クンブレ情報

表7：2001-2006年の反クンブレ抗議行動

年度	抗議行動の主要テーマ	デモ動員数
2001	エル・タヒンのピラミッドを傷つけるイベントの停止 タヒン-パパントラ間のバイパス建設	200
2002	タヒンのディズニールランド化を図る「タヒン春の壁龕計画」の中止	300
2003	クンブレに対する州政府予算の削減	500
2004	「光と音のショー」の演出者の外国人雇用反対、ショー代金の低価格設定 クンブレの民営化にむけた法律案の州議会上程阻止	4,000
2005	州政府の観光計画による文化財産の打撃に関するタヒン住民の意識化 反対運動によって弾圧・拘束された活動家の釈放	1,500
2006	EZLN の提起した別のキャンペーンなど全国規模の運動との連帯	4,000

の事前開示、テーマパークを近隣住民の教育文化活動の場にするなどの州政府に対する要請とともに、次のような決議が採択された（FNDPC 2002）。エル・タヒンに関する連邦布告凍結や考古地区縮小の企てに反対し、エル・タヒンを危機状況にある世界遺産として申請することが決議された。さらに、パパントラ市民連盟などによるクンブレ実施に対する仮処分申請の継続、公金不当使用で州知事に対する政治裁判を求めている。コユートラ地区の先住民の自治闘争やアテンコの空港反対闘争との連帯強化も謳われた。

このフォーラムではトトナカ地方の文化に関するワークショップの必要性も指摘された。エル・タヒンという文化財防衛の戦略確定にむけ、地元との協力関係しながら、クンブレに対抗する代替的な文化社会イベントを組織し、伝統医療、民族衣装、食事、建築法、伝承などトトナカ地方独自の文化を回復する必要性が指摘されたのである。こうしてタヒンを会場に、2003年3月上旬のワークショップ、3月19日から21日まで第一回トトナカ地方文化フェスティバルが開催されることになった²⁵⁾。この代替フェスティバルでは先住民フェリアも開催され、周辺住民、COCyPの農民、カリサルのカテキスタ、パパントラや海岸地域のボラドール・グループ、ベラクルスの音楽家、トトナカ山岳部の踊り手など約2万2千人が参加したとされる。

2004年3月には、コユートラ、エスピナル、パパントラ、ボサリカなど6地区から選ばれた委員で構成される「偉大なるトトナカ民族共同体審議会」が創設され、地域の社会問題に関する委員会や生産・経済活動に関連する委員会などが設置された。パパントラ市民連盟、INAHやENAHの関係者などの抗議グループは、次期知事による事業への財政支援の見直し、クンブレ会場の海岸部移転などを主張した。さらに、エル・タヒンが商業の見世物としての利用、とりわけ「春分の日の太陽エネルギー充電」のためのエル・タヒン訪問の宣伝がテレビで行なわれたことを批判している（Díaz 2004）。

州政権が交代した2005年には、議論と分析のフォーラムが開催され、エル・タヒンという文化財防衛に有効な法律の検討、先住民の文化・領域・統合的発展の社会的再活用（*reapropiación social*）、トトナカ地方文化フェスティバルの組織化などが検討された（COCyP y otros 2005）。州政府側などが逮捕命令の撤回や農民への援助を表明したため、この年の抗議行動は控え目なものとなった。2006年の

25) EZLN 司令官の参加はなかったが、2005年からのクンブレ統括責任者はワークショップ会場で「(州政府の)クンブレの計画の大半は間違っている」と自己批判しながら、対抗フェスティバルを実施しないように説得していた。

クンブレでは、クンブレに反対してきた COCyP に属するコユートラやパパントラの農民がクンブレのイベントに参加すると主催者側は発表していた。しかし、反対派デモ行進には、土地分配、農業支援、基盤整備という州政府の公約履行を求める COCyP のメンバーも参加し、2004年と同じ規模のものとなっている。反対派の要求には、テーマパークを「トトナカ地方先住民大学」にすることも掲げられていた (Morales 2006)。

クンブレ反対派によるトトナカ地方文化フェスティバルは2006年をもって終了している。結局、反対派はトトナカ地方の先住民などを結集する新しいアイデンティティの核となる対抗文化を構築できなかった。EZLN が提起した「別のキャンペーン」の支持者たちは、「別のトトナカ地方」運動を展開している。しかし、クンブレ反対派が創出できなかったトトナカ地方の伝統文化を構築する道筋は明らかとなっていない。

V. ボラドールの踊りという伝統の保存と育成

テーマパークの中心にボラドール広場があることからわかるように、先住民族トトナコの伝統文化としてよく知られているのは、ボラドールの踊りといっぴよい。2007年のクンブレの際、ベラクルス州政府やテーマパーク信託財団は、「パパントラのボラドール」を人類の口承無形文化遺産としてユネスコに申請する方針を明らかにした。

1. ボラドールの踊りはパパントラの文化遺産か

高さ十数メートルの木製支柱の上から、逆さ吊りになった4名の踊り手が水平方向に回転しながら地上に達するボラドールの踊り (Palo Volador, Danza de Voladores) 自体は、先住民族トトナコに限られたものではない²⁶⁾。トトナカ地方に隣接して居住する先住民族のテネーク、ナウァ、テペウア、ニャニュー (オトミ) でも、同じ様式のボラドールの踊りが存在している。歴史的には、オアハカ州やメキシコ州、トラスカラ州、さらにはゲレロ州、ミチョアカン州、ナヤリー州などでもボラドールの踊りが確認されている。ミチョアカン州のタリンバロでは、20世紀後半にも遊戯として行なわれている (Castro de la Rosa 1994)。また、グアテ

26) 起源地に関しては、トトナコ起源、ミステカ説、ワステカ説などがあり (Najer Coronado 2008)、時期に関しては、紀元前600年頃説 (Urcio 2006)、11世紀のトゥーラ説 (Stresser-Péan 2005) があるが、確証はない。

マラの先住民民族キチュの集落でもボラドールの踊りが行なわれていることが確認できる。

各言語でボラドールの踊りの関連用語がもつ意味は多様である。トトナコ語の場合、パパントラ周辺では踊り手は *kos'niin*、*kosni*（死者の飛行）と呼ばれているが、山岳部では *tsoqoqósnu*（飛ぶ人）となっている。一方、アパパンティリャでは、ボラドールの踊り自体を *patsiwiwú*（回転する振れた物）と呼んでいる（Ichon 1969:377）。一方、テネーク語では、*bishom tiu*、*bixom t'iiw*（鷲の踊り）、テペウア語では *aqsoqon*（鷲の踊り）となっており、ほぼ同じ意味の言葉が使われている。オトミ語では、支柱は *t'ok'sioni*（羽毛の支柱）と呼ばれ（Galiniér 2004:170）、踊り手は *rataxónio rataxóni*（飛ぶ人）と呼ばれる（Stresser-Péan 2005）。ナウァ語では、踊り手は *quauhpatlanque*（木から飛ぶ人）となっている。

ボラドールの踊りでは、4名の踊り手が逆さ吊りで13回転しながら地上に下りるという「定説」がある。これは17世紀初頭にメキシコ市でボラドールの踊りを実見したトルケマダの解釈に基づくもので²⁷⁾、 $13 \times 4 = 52$ がアステカの一世紀に対応することから根強く支持されてきた。しかし、現在の回転数は13回以上であり、山岳部トトナカ地方では25回前後が標準である。回転数が増加した一因はボラドールの支柱が高くなったことである。

回転しながら下りてくる踊り手も4名とはかぎらない。グアテマラのボラドールでは、踊り手は2名の場合が多く、逆さ吊りになることも少ない。一方、ペブラ州山岳部の先住民族トトナカの集落やイダルゴ州山岳ニャニュの集落では、踊り手が6名となることも報告されている²⁸⁾。トルケマダやクラビヘロの報告でも、6名や8名のこともあるとされている（Torquemada 1969；Clavijero 1971:246）。また、トトナカ地方には、ボラドールの踊りの原型とされるウァウァ（Guagua、Huahua）と呼ばれるボラドールの踊りがある。この踊りは十字架型の木にしがみつけた4名が垂直方向に回転するのが特徴である。この踊りでも2人や6人で回転する例が報告されている²⁹⁾。

ボラドールの踊りは、先スペイン期には「新しい火の儀式」に際して上演され、

27) 17世紀初頭、トルケマダが「ボラドール広場 (plazuela del Volador)」で目撃した踊りでも、回転が13回に達していないものがあったという（Torquemada 1969:II, 305-307）。

28) 6名の事例はイダルゴ州山岳のウエウエトリージャで実見されている（Galiniér 2004:166）。

29) この形式のボラドールは、ケツアリンの踊りとも呼ばれ、トトナカ語では *lakka*（金剛インコ）と呼ばれる。ニカラグアで *Comelagatoatze* と呼ばれていたものと同じく、元々乗り手は2人だったとされる。乗り手が6名の事例は *Mompardé y Gutiérrez*（1981:145）にスケッチがある。

植民地期以降はカーニバルや6月初めのコルプス・クリスティ、あるいは年一度の守護聖人の祝祭日に行なわれていたとされる。先スペイン期のボラドールの踊りが豊穡儀礼として行なわれていたことは確実に、植民地当局は何度もボラドールの踊りを禁止していた。しかし、植民地期初期には、先住民の洗礼式などのキリスト教儀式、植民地当局者が行なった祝祭でボラドールが上演されたことを示す資料もある³⁰⁾。

現在のボラドールの踊りが本来あった宗教的・シンボリックの意味合いを失い、商業活動に墮落しているという批判は根強いものがある (Castro de la Rosa 1994)。パパントラ市やメキシコ市の人類学博物館などでは、ボラドールの踊りは年中演じられ、各地の民族祭典で「パパントラのボラドール」は観客を引きつける重要なアイテムになっている。このような興行化が始まったのは1930年代で、同時期にはパパントラだけでなく各地でボラドールの踊りのグループが組織化されたという³¹⁾。1960年代前半に調査を行なったイチョンは、パパントラに「土着的踊り手単一協会 (Asociación única de danzantes autóctonos)」があり、メキシコ各地や米国で興行していたと報告している (Ichon 1990:391)。現在の「パパントラ踊り手ボラドール組合 (Unión de Danzante y Volador de Papantla)」には18集団が登録され、組合メンバーは南米や北米、ヨーロッパでボラドールの踊りの公演を実施している。サーカスのような見世物となる過程でスペクタクル性を高めるため、支柱は30-40メートルの高さになっていく。また、20メートル以上の木の確保が難しく、木の設置の手間を省くため、ボラドールの支柱はメキシコ石油公社の工場で作られた鉄骨製となっている。

2. ボラドールの踊りの「伝統」の復活

2004年のクンブレの期間、第1回ボラドール集会が開催された。トトナカ地方だけでなく、プエブラ北部山地のナウァ、サンルイスポトシ州のテネークが参加している。さらにグアテマラ先住民民族キチェのサンタマリア・ホシャバフ (Joxabaj) のボラドール・グループも招待された。第2回集会は2006年3月18日に開催され、トトナカ地方だけでなく、プエブラ州クエツァランのナウァ、サン

30) 前者として Cócice Azcatitlan に記載された1530年のクルウェカンの洗礼式、後者として副王マルティン・エンリケス期にメキシコ市「ボラドール広場」での「メキシコ征服」の祝祭の事例をあげることができる。

31) 1937年にサンルイスポトシ州を調査したストレサは、地元の研究者が廃れたボラドールの復元に関与していたことを報告している。

ルイスポトシ州のテネーク、北プエブラ山地のニャニューなどが参加している。

こうしたなか、クンブレ関係者の働きかけで伝統的なボラドールの再現が試みられてきた。パパントラ市の中心広場、エル・タヒン遺跡の入口、テーマパーク広場などに設置されたボラドールの支柱は鉄製で固定されたものだった。森の木を選んで伐採し、広場に支柱として植えつけるといふ儀式は、パパントラでは長く行なわれていなかった³²⁾。ボラドールの踊りが伝統文化遺産として登録されるには、こうした伝統儀式の復活は不可欠である。クンブレ運営者の主導によって、2006年からタヒンでボラドールの木の切り出し、植えつけの儀式が行なわれている。儀式には、パパントラ・ボラドール協会やボラドール養成学校の子供、地元住民が参加している。

以下、2006年3月と2008年9月21日の秋分の日に行なわれた事例³³⁾から、儀式の様子を要約してみよう。早朝、遺跡の裏手の森で木の選抜と伐採の儀式が伝統に従って行なわれた³⁴⁾。赤色の髭のついた仮面、薄桃色の髭のない仮面を被った二人の長老に導かれ、人々は山中を1時間近く木を探して回る。高さ25メートルほどの木が見つかったら、森の主キウィコロ (kiwicolo) に許可を乞う儀式を行なう。笛と太鼓が奏でられるなか、根元にコパール、ラム酒、ロウソクや花を供えられた。森の主を体現する仮面をつけた二人の長老が見守るなか、カポラルが木の東側から南、西、北へと象徴的に斧をいれ、その後男4名が斧をふるっていく。木に綱が結ばれ、子供たちが綱を引っ張るなか、木は倒される。その後、約150人が木に結び付けられた綱を引き、テーマパークまで運ぶ。

テーマパークの広場には、深さ3メートルの穴が掘られ、森の主のために黒い鶏、タバコ、焼酎が捧げられた。鶏は森の主の食欲を充たしボラドールの命を奪うことがないように、焼酎は森の主が渇きを覚えボラドールの血を求めることがないように、タバコは事故を呼び起こしかねない悪い風 (aire) を打ち負かすためとされている。1時間かけてボラドールの木は地面に固定され、カポラルや子供たちは祭壇の前で祈りを捧げた。その後、養成学校の4名の子供がボラドールの木に登り、カポラルの奏でる笛と太鼓に合わせて、回りながら下りてきた。

32) 2006年にタヒンで行なわれた儀式は55年ぶりと新聞記事は述べている。一方、プエブラ州クエツアランの聖フランシスコ祭に行なわれるボラドールの踊りを記録した1993年のNHKテレビ番組のコメントでは、クエツアランでは毎年、山に松の木を伐採に行くとして述べている。

33) 2006年の事例はGómez (2006)、2008年の事例はCaballero (2008)とVidal (2008)を参照。

34) パパントラのコルプス・クリスティにおけるボラドールの踊りの手順は、Alvarez Boada (1985: 82-83)に記述されており、両年度の報告もほぼそれと同一と言ってよい。

3. ボラドールの踊りにおける女性排除の伝統

パパントラで復活したボラドールの木の植え付け儀式では、木の探索や牽引の最中、女性や部外者がいるとうまく展開しないなどと、女性排除という原則が表に出てきている。これはボラドールの木が男性器をシンボライズしたものであるという見方を反映している。だが、ボラドールの踊り手は男性に限定されるというパパントラの「伝統」は、クンブレの場に招待された他地区のボラドール・グループのあいだでは必ずしも守られていなかった³⁵⁾。

2004年のクンブレ期間中に開催された第1回ボラドール集會には、先住民族テネックのボラドール・グループに少女1名が含まれていたことが確認されている (Martínez Cabral, 2005)。2005年のクンブレでは、女性だけのグループが2組参加していた。プエブラ州クエツアラン地区のコアトリンチャンの女性グループ、そしてベラクルス州ソントコマトランとコシュキウィの女性グループである (López 2005)。2005年の場合、パパントラのボラドール関係者は女性の踊り手の参加に否定的だったが、州知事やクンブレ運営者などの要請で参加を認めている。

女性参加を認めるボラドール・グループでも、女性の踊り手には一定の制約が課せられている。ソソコルコのカポラルによると、女性の踊り手は先スペイン期の神々や聖ミゲルやサンティアゴといった守護聖人に踊り手となる許可を求める儀礼をする必要があり、未婚者は処女であること、既婚者は1週間前から性関係を断つといった禁忌が課せられる。女性は悪い風を呼ぶ危険な要素とみなされ、カポラルは危険度に応じ女性を平手打ちで叩き、熱を追い出すという。規律が守られなかった場合、踊りや共同体によくないことが起き、不幸は1年間続くと言われる (Morales 2007)。

2006年のクンブレでは、ソソコルコのグループのカポラルだったヘスス・アローヨ (71歳) が支柱から墜落し、死亡する事件が起きた。翌2007年のクンブレでは彼の追悼式が組織された (Morales 2007)。家族や親族は、故人は「エル・タヒンの神々の元にいる」と述べていたが、パパントラのボラドール関係者の多くは彼の死を天罰とみなしたという。彼の墜落死を天罰とする見方の背景には、ヘスス・アローヨが、ボラドールの踊りに女性の参加を認めた最初のカポラルだったことがある。娘のイサベルは、父親の指導で、1972年からマメイの木を使ってボラドールの踊りを秘密裡に練習し始めたという。その後、3人の姉妹もボラドールの踊

35) プエブラ州のクエツアランの女性たちは自己解放のためにボラドールの踊り手になるといい、女性の組合が組織され、パパントラの女性排除の方針と対抗しているという (Díaz 2008)。

りを習うようになった。1970年代の半ば、父親をカポラルとする4姉妹のボラドール・グループが形成されたという。翌年のクンブレでも、ソソコルコのボラドール・グループには、20歳の女性が1名含まれていた（Morales 2007）。

パパントラのトトナコ長老審議会はボラドールの踊りに女性が参加することを禁じてきた。その原則は2006年に発足した少年ボラドール養成学校にも持ち込まれている。少年ボラドール養成学校は、全国先住民開発委員会（CDI）、国立文化基金（FONCA）、パパントラ独立ボラドール協会クゴスニン（Kgosnin）、民間企業クリエイティブの提供した資金で運営されている。FONCAは毎月1万5千ペソを1年間、CDIは総額で5万5千ペソを援助することになった。2006年度は、8歳から14歳までの子供15名がボラドールとして育成された。計画では、実技だけでなく、トトナカ語の読み書き、許しの踊り、賛美歌、賞賛の祈り、葦笛の製作、ボラドールの衣装の刺繍やスパンコールのつけ方などが、週末の土曜日に教授されることになっている。

むすびにかえて

2007年、ベラクルス州政府はパパントラのボラドールの踊りを人類の口承無形文化遺産として申請すると表明した（Martínez 2007）。申請に当たって、パパントラ・ボラドール協会、タヒン芸術センター、トトナコ最高審議会、エル・タヒン遺跡地区、クンブレ・タヒン、テーマパークなど地元関係者、CDI、INAHなどの国の関係機関で構成される審議会が組織された。2008年9月30日、審議会はユネスコへの正式申請書を提出した（INAH 2008）。

しかし、伝統文化遺産としてパパントラのボラドールの踊りを維持するにはいくつもの問題がある。一つはボラドールの踊りの「精神的要素」の喪失である。現在のボラドールの踊りでは、「本来の」宗教性、儀礼性が希薄化し、商業性・娯楽性が支配的なことは誰の目にも明白である。ついで、森林伐採によりボラドールの踊りに不可欠なボラドールの木（主にチコサポーテの木）が確保できないことが指摘されている。さらに、ボラドールの踊り手に対する生活保障の問題が指摘されている（INAH 2008）。

また、遺産登録を推進する当事者が見落としがちな問題点もある。2008年8月6日、「人類学と無形文化遺産」と題するフォーラムがINAHで開催され、国内の無形文化遺産をめぐる危機的問題が指摘されている。一般的な問題として、踊りや祭壇などの文化遺産の商業的流用、民族音楽の無断録音、伝統文化遺産の儀式的

政治利用などが挙げられている。また、個別事例として、観光担当部局が共同体の慣行への過度に介入するという問題も指摘されている。さらに、「パパントラのボラドールの踊り」の事例が挙げられ、他地域にも広く存在する文化遺産を「特定地区の固有の文化遺産」として専有するという問題も指摘されている (Investigadores del INAH 2008)。つまり、ボラドールはパパントラの専売特許ではなく、トトナカ地方やワステカ地方に広く見られる伝統ということが無視されているのである。また、トトナカ地方は先住民民族トトナカだけの居住地でなく、ナウァやテネークなど他の先住民民族も居住する多文化共存地域であることも見落としてはならない。

無形文化遺産として世界遺産に登録するには、ボラドールの踊りに付きまとうスペクタクル性や商業性を希薄化することが不可欠である。2007年7月のベラクルス州議会において、パパントラ地区選出議員は、商業的上演に対する規制や部外者によるボラドールの踊りを禁止するべきだと強調している³⁶⁾。クンブレ関係者も、ボラドールの木の伐採と植え付けの儀式的復活などで、ボラドールの踊りの「真正性」を強化しようとしてきた。

しかし、メキシコ最古のアタイデ・サーカス (Circo Atayde) のブランコ曲芸グループが2008年のクンブレに招待され、パパントラのボラドール・グループがアタイデの記念興行にゲスト出演したことを考えるなら、「パパントラのボラドールの踊り」には、もうひとつ別の選択肢があるかもしれない。ヨーロッパのサーカスのブランコ曲芸に先立ってアメリカ大陸で誕生し、植民地期以降も独自の娯楽性をもつ曲芸として発展してきた「伝統文化」と位置づけて遺産登録するほうに説得力があるように思われる。

こうした「伝統」や「真正性」の強化が模索されると同時に、州政府や INAH の官僚、連邦政府の公教育省や観光省関係者は、自然であれ文化であれ、世界遺産の商業的活用という方針を堅持している。新自由主義経済政策を旗印とする PAN 政権は、遺跡における文化事業という名目で、「アトラクションの開発」(クリフォード 2002:265) を行ない、各地で世界遺産遺跡の商業的な活用を推進している³⁷⁾。

36) 部外者の例として日本人が行なった事例が言及されているが (Figuerola 2007)、これは日本テレビ「世界の果てまでイッテQ」で3月に放映された宮沢大輔のボラドール体験報告をさすと思われる。

37) 2008年10月には、チチュン・イツァーの世界遺産登録20周年としてブラシッド・ドミンゴのコンサートが復活し、2009年からテオティワカンの夜間の「光りと音のショー」が20年ぶりに復活することになっている。

チアパス州の世界遺産パレンケ遺跡では、近接するアグア・アスル滝にエコツーリズムを謳ったテーマパークを建設し、パレンケとセットで「新たなカンクン」として売り出そうとする構想が蠢いている。

参考文献

Ahmad Molinari, Danile

2004 “El ordinamiento territorial de El Tajín”, *Diario de Campo*, octubre, pp.27-33.

Boada, Manuel Alvarez

1985 *La música popular en la Huasteca Veracruzana*. Premia.

Brüggemann, Jürgen

1992 *La ciudad y la sociedad en Tajín*, Gobierno del estado de Veracruz.

Bustos, Analleli y Flor Jiménez

2007 “Seis mil habitantes del Tajín continúan sin agua entubada ni drenaje; desde la administración de Miguel Alemán solo han escuchado promesas”, *Informatepr*, 16/marzo.

Caballero, Jorge

2008 “Reviven tradición cosmogónica en Veracruz: el corte del Palo Volador”, *La Jornada*, 23/septiembre.

Castro de la Rosa, Ma.Guadalupe

1994 “La danza en el Norte de Veracruz”, *Arqueología Mexicana*, 5.

Castro Soto, Juan

2002 “Privatización de la historia: Caso Tajín”, *Boletín de Ciepac: Chiapas al Día*, No.316, 10/octubre.

Celia, Alma

2003 “No ha cumplido sus promesas gobierno del estado a la comunidad del Tajín”, www.informatepr.com2003.

Clavijero, Francisco Javier

1971 *Historia Antigua de México*, Editorial Porrúa.

COCyP y otros

2005 “Declaración en torno a la defensa de su patrimonio económico, natural y cultural. Rumbo al Festival Cultural del Totonakapan”, *Apia virtual*, 1/marzo

Consejo Indígena Permanente

2006 “Niños totonacos aprenden a volar”, *Boletín de CIP*, 6/marzo.

Cruz Bárcenas, Arturo

2008 “La cultura totonaca pervive en el centro de las artes indígenas”, *La Jornada*, 9/marzo.

Cumbre Tajín

2008a “2006, año de consolidación del Parque Temático Takilhsukut”, www.cumbretajin.org.mx.

Diario Oficial de la Federación

2001 “Decreto por el que se declara la zona de monumentos arqueológicos el área conocido El Tajín”, *Diario Oficial de la Federación*, 30/marzo.

Díaz, Livia

2004 “Nueva marcha de protesta contra la Cumbre”, *Informatepr*, 21/marzo.

Figueroa, Marisol

2007 “Piden diputados respeto a la Danza de los Voladores; se trata de preservar la cultura sin comercializarla”, *Informatepr*, 18/julio.

Frente Nacional en Defensa del Patrimonio Cultural (FNDPC)

2002 “Resolutivos del tercer Encuentro en Defensa del Patrimonio Cultural, El Tajín, VER. 14 de diciembre de 2002”, www.informatepr.com2002.

Frente Regional en Defensa del Patrimonio Cultural (FRDPC)

2003 “Bienvenida la visita del Subcomandante Insurgente Marcos”, *Comunicado a los medios*, 6/febrero.

Frente del Totonacapan en Defensa del Patrimonio Cultural (FTDPC)

2006 “La lucha contra Cumbre Tajín y la privatización de las zonas arqueológicas”, *Zapateando*, 6/marzo.

Galinier, Jacques

2004 *The World Below. Body and Cosmos in Otomí Indian Ritual*, Univ. Press of Colorado.

Gómez, Edgar

2006 “Se realiza el corte del Palo Volador en el marco de la Cumbre Tajín”, *Orizaba en Red*, 6/marzo.

Ichon, Alain

1990 *La religión de los totonacas de la sierra*, INI/CNCA.

INAH

2008 “Seducirán a la UNESCO”, *dit.inah.gob.mx*, 27/septiembre.

Investigadores del INAH

2008 “Declaratoria sobre patrimonio cultural inmaterial”, *investigadoresinah.org.mx*, 8/septiembre.

Jiménez, Arturo

2001 “El plebiscito en Veracruz definirá el futuro de la Cumbre Tajín”, *La Jornada*, 11/septiembre.

López, Guadalupe

2001 “Efectúan ceremonia de permisión en El Tajín para la fiesta de equinoccio de primavera”, *La Jornada*, 23/marzo.

2005 “Debutan este año. Habrá mujeres voladoras en Cumbre Tajín”, *La Jornada*, 17/marzo.

Marcos, Subcomandante

2003 “Marzo: Veracruz, la tercera estela”, *La Jornada*, 4/febrero.

Martínez Cabral, Lizeth Adriana

2005 *Festivales y mercantilización cultural : Cumbre Tajín un estudio de caso*, Tesis de Maestría de Universidad de las Americas Puebla. Escuela de Ciencias Sociales, Departamento de Antropología.

Martínez, Regina

2007 “Se propondrá a la UNESCO la danza de voladores de Papantla, como patrimonio de la humanidad”, *Proceso*, 20/marzo.

Masferrer Kan, Elio

2004 *Totonaco*, CDI.

Mompardé, Elecetra y Tonatiuh Gutiérrez

1981 *Danzas y Bailes Populares*, tomo I, Editorial Hermes.

Morales, Andrés

2000 “Condenan totonacos la profanación de El Tajín”, *La Jornada*, 13/marzo.

2001 “Autoriza la SEP la clausura de Tajín 2001 en zona arqueológica”, *La Jornada*, 10/marzo.

2006 “Miles de campesinos totonacos realizaron protesta en contra la Cumbre Tajín”, *La Jornada*, 20/marzo.

2007 “Luchan mujeres totonacas por ser parte del ritual del los Voladores de

- Papantla”, *La Jornada*, 26/marzo.
- Morales, Andrés y Guadalupe López
2001 “El gobernador Alemán Velasco deslindó a su gobierno del desplome del templete en El Tajín”, *La Jornada*, 17/marzo.
- Morquecho, Melina
2003 “Cumbre Tajin para todos. Inauguran Cumbre Tajín 2003”, *Infomatepr*, 19/marzo.
- Najer Coronado, Martha Ilia
2008 “El rito de ‘palo volador’: encuentro de significados”, *Revista Española de Antropología Americana*, vol.38.
- Posada García, Miriam
2004 “El encuentro debe seguir”, *La Jornada*, 22/marzo.
- Ravelo, Renato,
2000 “Tajín 2000 buscará puentear la vida urbana con habitantes del lugar”, *La Jornada*, 17/febrero.
2001 “Alemán Velasco ya presentó ante Sectur el proyecto para construir un nicho en Tajín”, *La Jornada*, 1/octubre.
2002a “Desautoriza INAH construcción de nichos en El Tajín”, *La Jornada*, 20/enero.
2002b “Planean realizar espectáculo de luz y sonido en la Cumbre Tajín”, *La Jornada*, 2/febrero.
- Ravelo, Renato y Guadalupe López
2001 “La Tajín 2001 se reconcilió con la zona de Totanacapan en su clausura”, *La Jornada*, 22/marzo.
- Solis, Juan
2008 “Luz y sonido, nueva oferta en zona de Tajín”, *El Universal*, 5/marzo.
- Stresser-Péan, Guy
2005 “El volador. Datos históricos y simbolismo de la danza”, *Arqueología Mexicana*, 75.
- Torquemada, Juan
1969 *Monarquía Indiana*, 3 tomos. Editorial Porrúa.
- Urcio, Javier
2006 “Antigüedad y distribución de la danza de los voladores”, *Arqueología*

Mexicana, 81.

Vidal, Rodrigo

2008 “Ejecutan ritual del volador; Totonacas mostraron el esplendor de la ceremonia del permiso, corte, arrastre y siembra del árbol”, *Informatepr*, 21/septiembre.

クリフォード、ジェームズ

2002 『ルーツ 20世紀後期の旅と翻訳』毛利嘉孝ほか訳、月曜社。

小林貴徳

2007 「ローカルからみつめるインターカルチュラル教育—メキシコ、ゲレロ州先住民大学創設をめぐるねじれた現実」京都ラテンアメリカ研究所紀要7

小林致広

1985 『沈黙を越えて—中米地域の先住民運動の展開』神戸市外国大学研究叢書16